



愛知県・私立
はるひがおか
春日丘中学・高校

6年一貫教育

6年後を見据え 基礎学力・学習習慣の 定着を図る

◎1965年に中部工業大学附属高校として開校。90年に中学校を併設し現校名に改称。主に中部大への進学を目指す進学コース、国公立大・難関私立大を目指す国際コース・特進コース、6年一貫の啓明コースの4コース制。カナダの姉妹校との留学生交流や語学研修など国際教育にも力を入れる。

設立

1965(昭和40)年

形態

全日制／普通科／共学

生徒数

1学年約500人(啓明コースは約100人)

11年度入試合格実績(現役のみ)

国公立大は、名古屋大、京都大、愛知教育大、名古屋工業大、横浜国立大、金沢大、三重大などに98人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、明治大、早稲田大、南山大、同志社大、立命館大、関西学院大など延べ701人が合格。

住所

〒487-8501
愛知県春日井市松本町1105

電話

0568-51-1131

Web Site

<http://www.haruhigaoka.ed.jp/>

変革のステップ

背景

◎公立高校への進学者が中心の地域に位置する。保護者の信頼を得ようと中高一貫校化を打ち出し、進学実績の向上を目指す

実践

◎学習記録などによる学習習慣の確立、「立志式」や「縦割り班」による集団づくり、中高教師の交流による指導力の向上

成果

◎進学実績は向上し、市内屈指の進学校として認知される。中高の接続により教育力は向上し、組織も活性化

中高一貫校化により 進学実績の向上を目指す

春日丘中学校は、春日丘高校創立25周年の節目の年に開校した、市内唯一の私立中学校だ。中高一貫校となり20年が経った今、大学進学実績は中学校創立時から飛躍的に向上し、市内でも有数の進学校へと変容を遂げた。特に、中高一貫の「啓明コース」では、過去5年間で50%を超える生徒が現役で国公立大に合格し、10年度入試では10人以上の旧帝大合格者が輩出した。

もつとも、実績が出るまでの道のりは決して平たんではなかった。二村啓教頭は特進部主任だった当時を次のように振り返る。

「進学実績が出るまでは、保護者会で厳しい意見をいただくことがしばしばありました。『もっと目標と計画をはっきりしてほしい』と真正面から言われたこともあります。保護者の不安を取り除き、信頼感を高めるためには、何よりも進学実績という結果を示す必要があります」

愛知県は伝統的に公立高校の人気が高く、進学実績の乏しい私立高校が、学力の高い生徒を集めるのは容易ではない。当時の同校も、公立高校に学力が届かなかった生徒を受け入れ、学力を付けさせて大学に送り出すという高校だった。しかし、少子化の波が押し寄せる中で、更

に高い進学実績を保証しなければ学校が生き残ることは出来ないと感じ、中高一貫校という新しい段階へと踏み出したのである。

「毎日の学習記録」「年間学習プラン」で学習習慣の定着を図る

中高一貫校には、高校受験のプレッシャーを与えずに、じっくり時間をかけて生徒を育てられるメリットがある。同校の中学校では、基礎



春日丘中学校・高校教頭
二村啓 Futamura Hiraki

教職歴・赴任歴共に31年。「教師は生徒の灯台。生徒が日々変化する自分の現在地を把握できる存在でありたい」



春日丘中学校・高校
浜本英昭 Hamamoto Hideaki

教職歴・赴任歴共に19年。特進部主任。「どんな生徒も頑張れる環境があれば頑張る。進路実現の出来る環境づくりに努めたい」



春日丘中学校・高校
清水宣隆 Shimizu Nobutaka

教職歴・赴任歴共に19年。中学校教務部主任。「生徒に夢を描かせ、その実現に向けての現実的な力を付けさせたい」



春日丘中学校・高校
長谷川雄一 Hasegawa Yuichi

教職歴・赴任歴共に16年。高校2学年副主任。「教師という職に責任と誇りを持って、生徒一人ひとりの進路実現を手助けしていきたい」

学力の育成に重点を置いている。中学校教務部主任の清水宣隆先生は次のように述べる。

「本校でいう基礎学力とは、高校での学びの土台となる学力のことです。中学1・2年生では、漢字や計算などの基礎事項を徹底して身に付けさせることが、高校入学後の学習効果を高めると考えています」

基礎学力を身に付ける前提として、同校が重視するのは学習習慣の確立である。宿題は担任が必ずチェックする。チェックしない宿題は、宿題とは呼ばないというのが同校の不文律だ。忘れた生徒は担任の監督の下で取り組ませる。また、生徒自身が自由に教科を選んで学習する「自学ノート」にも取り組ませている。

「毎日の学習記録」は、学習習慣の定着に欠かせない取り組みだ（P.22図）。冊子形式の学習記録帳で、日々の生活・学習時間を記入する欄と、日記形式の自由記述欄で構成されている。

「勉強すれば確実に学力は上がるのですが、教師が放っておくと生徒は勉強しなくなりま

す。これは開校以来、本校の教師が意識して指導し続けてきたことです。生徒には中学校に入ったからこれくらいの学習は当たり前と思わせて、学習習慣を付けさせることが大切であり、そうして土台を築くことは高校進学後の成長につながると考えています」（清水先生）

「年間学習プラン」も学習習慣定着に効果を

上げている。生徒は日々の教科の宿題に加え、このプランに明示された学習に取り組む。直近の目標を次々と提示して、間断なく学習に向かわせるのだ。保護者に家庭学習を支援してもらえよう、「年間学習プラン」は学年通信に掲載し、「今は何に向けて学習すべき時期なのか」ということを伝えている。

学年を超えた「縦割り班」で協調性やリーダーシップを涵養

中学校では、大学受験に備えての集団づくりも重視する。「啓明コース」では頻繁に学年集会を開き、「集団全体が良くならなければ自分も成長できない」「生徒同士で高め合っているかどうか6年後の進路を左右する」ということを繰り返し伝え、集団意識を育てている。

10人程度の中学1〜3年生で編成される「縦割り班」も、集団づくりに欠かせない取り組みだ。啓明祭（文化祭）や校外学習、百人一首大会などの学校行事は、この縦割り班で活動する。中学校時代に身に付けたリーダーシップや協調性、共同作業の手際の良さは、高校進学後の行事などで発揮されるという。高校2学年副主任の長谷川雄一先生は次のように述べる。

「高校で職場訪問や修学旅行などの準備をさせると、生徒同士ですぐに計画を立てたり役割分担を決めたりするチームワークに驚か

校用にバージョンアップさせたものだ。更に、中学校からの成績推移を見る「累積個表」も、中学校での経験を生かして導入した。

中高の接続や連続性の面でも、教師の相互交流には大きな効果が表れていると、浜本先生は話す。

「学習計画を立てる際、中学校では試験の2週間前に計画を立てさせ、回収して点検し、具体的な計画を立てられるまでやり直しさせますが、高校では用紙を配るだけで、生徒の主体性に任せていました。ところが、自由度が高すぎたためか、生徒が戸惑う場面もありました。中学校で学習習慣や基礎学力の定着など手厚い指導をされている分、高校は面が見が悪いと思う生徒もいるようです。今は中学校との連続性を考慮しながら、少しずつ手を離していく指導の必要性を感じています」

中学校の指導を知っているからこそ、高校への移行をスムーズにする工夫が生まれるのだ。

中高接続により6年後を見据えた教育を意識

高校での指導を経験した教師が中学校でも指導することで、高校卒業時に必要な力を見通した指導を意識するようになるという成果もあった。前述の学習記録も、高校で取り組んでいたものを中学校でも行うようにした。

「当初、中学校では『心を育てる教育』として、日記指導を行っていました。しかし、中学校から高校へ持ち上がり、大学に生徒を送り出した経験から、中学校でも日々の学習をきちんと見取り、大学受験に必要な基礎学力を付ける必要性を感じました」（清水先生）

清水先生は、再び中学校を受け持った時、その学習記録を中学校にも導入した（図）。

このような相互交流が、中高の壁を超えて教師の連帯感や協調性を高めている。

「以前は、高校は中学校から生徒を『もらっている』という意識がありました。今は生徒と一緒に高校へと持ち上がることも多いので、中学校での指導はどうあるべきか、中学校で身に付けた力を高校でどのように伸ばすかということ、これまで以上に考えるようになりました」（清水先生）

「中高のどちらかしか知らなければ、互いに要求し合うだけで終わってしまいます。それぞれの立場を知ることが相互理解につながり、力を合わせて学校全体を良くしていくという意識が芽生えるのです」（二村教頭）

保護者の信頼感が向上 次の課題は生徒の主体性の育成

中学校の併設から20年が過ぎ、市内有数の進学校となった春日丘中学・高校。かつて保護者

会で投げ掛けられたような不安や不信も、今は聞こえなくなった。

「本校には進学校としての伝統がありません。だからこそ、いろいろなことにチャレンジできたのだと思います」（二村教頭）

今後の課題は、学校主導の学習から生徒の主体性を生かした学びへの転換を図ることだと、清水先生は話す。

「学習量が増える高校では、中学校までのドリルや復習中心の学習スタイルでは、その量に対応できません。予習中心のスタイルへ転換し、学習の質を高めなければなりません。その転換がスムーズに出来るよう、中学校でもきちんと支援することが課題です」

高校では、生徒が自分で考える場面を今以上に多く設けたいという。例えば、学習合宿では講義が中心だが、今後は生徒自身に学習する内容を決めさせて、自由に質問しながら学びを深めていくというように、少しずつ手を離していくことを考えている。

「生徒の力を最大限に伸ばすには、学校が一方的に与えるだけでは不十分です。最後は、生徒自身がどれだけ主体的に学びに向かうかが決め手になります。しかも、その方法は一律ではなく生徒の数だけあります。どこまで手を掛けて、どこで手を離していくのか。生徒と向き合い、皆で協力し合いながら模索していきたいと思います」（長谷川先生）

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。

2010年6月号指導変革の軌跡「東京都・私立吉祥女子中学・高校」など

▶▶▶ <http://benesse.jp/berd/> → HOME > 情報誌ライブラリ(高校向け)